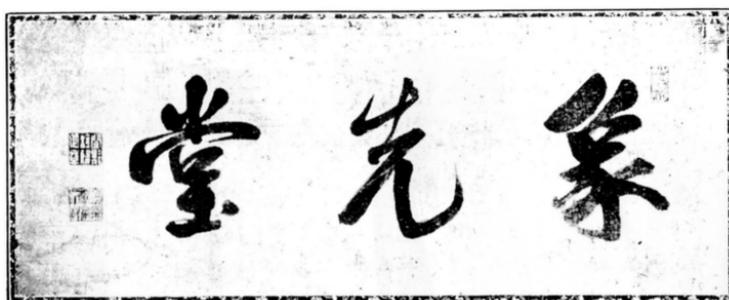


伊東玄朴と大槻磐溪

玄朴と磐溪

伊東玄朴(1800~71)は、文政11年(1828)に江戸本所番場町(現・墨田区東駒形一丁目)で開業し、翌年下谷長者町(現・台東区上野三丁目)に転居し、天保2年(1832)には一代佐賀藩医となった。

天保4年に、下谷和泉橋通(現・台東区台東一丁目)に移転し、象先堂を開塾した。象先堂は24間×30間という大きな屋敷で、正面玄関には象先堂という扁額が堂々とかかっていた。越前鯖江藩主間部詮勝の揮毫である。塾名は友人大槻磐溪が撰した。



玄朴は大槻磐溪ととりわ

け仲がよかった。磐溪は蘭学者大槻玄沢の二男で、享和元年(1801)に江戸で生まれた。幼名を六二郎、のち平次、晩年は磐翁と称した。名は清崇、字は士広、号を磐溪という。文化13年(1816)に16歳で元服して大学頭林述齋に入門し、翌年、幕府昌平黌に、文政10年(1827)の27歳まで学んだ。

玄朴との交際のきっかけは不明だが、ほぼ同年の無二の親友だった。玄朴は、磐溪が偉大な蘭学者大槻玄沢の二男ということで、敬意をもって接していたようだ。

玄朴が塾を開いたほぼ同時期の天保3年の32歳のとき、兄の玄幹のもとを離れて漢学塾を開いたが、その経営は貧窮を究めた。玄沢の子が蘭学でなく、漢学を教えるのはやはり多くの漢学者のなかでは目立たなかったのだろう。

磐溪の借金

仙台の宮城県図書館に大槻磐溪の日記が所蔵されている。その日記をよむと、たびたび磐溪が玄朴に借金を申し込んでいることがわかる。

(天保11年2月)借金十両を深く乞う、之を諾す、余が喜び知るべきなり。

玄朴は黙って10両を貸してくれた。1両を10万円とみると100万円である。磐溪は心から喜んだ。磐溪はその後も玄朴から何度も借金をしている。

たとえば、翌天保12年7月の日記には

余曰く願ひ数を増し五十円(両)と為す。玄朴之を諾す。余が狂気知るべきなり、且つ息無し五年賦、券書(証文)要せず、義気欽む(うやまう)べし、(始有廬日記、天保十二年七月)

今度は50両の借金を願った。しかし、玄朴は之を貸してくれた。それもなんと無利息で5年賦で、借金証文をなしで貸してくれたのだった。磐溪は感涙にむせび泣いた。

磐翁年譜によると、天保12年前後は「頃年家計甚だ難ム」(天保十二年)とある。長兄の玄幹から独立して一家を起こしたのが天保3年の32歳の時であった。

苦しい時を救ってくれた玄朴に対し、

天保十二年、次の詩を詠じた。

感泣滂沱として巾湿さんと欲す、救窮の恩は君親に減ぜず、錐刀(ささいな物事)利を争い、滔々(世間の風潮に従うさま)として是、眩達(心が広いこと)公(玄朴をさす)の如きは幾人か有る(鶏肋存稿)寧静閣集(詩集、日本漢詩)第十七集、汲古書院の寧静閣一集のなかにある)

感謝の気持ちで一杯である。困窮を救ってくれた恩は主君や親への恩とかわりない、あなたのような心の広い人は、世間に何人もいるだろうか、と。

玄朴も塾を開いたころは門人がなく、恩師の島本龍嘯に、門人を回してほしいと頼んでいたほどだった。が、天保10年頃は、もう蘭方医としての評判は高く、大勢の患者で、象先堂塾は賑わっていた。

種痘と磐溪

天保八年に長女春が生まれた。天保10年5月長男の順之助が生まれた。しかし、翌年閏正月に疱瘡にかかりわずか十ヶ月でなくなった。

磐溪は、掌中の珠砕きて還期没し、此老の情懐誰に訴えんと欲す、腸断の阿娘わずか五歳、遊嬉し猶自ら嬌児を喚ぶ、(鶏肋存稿)という詩を書いて、五歳の娘が可愛い子と一緒に遊ぼうと喚んでいる

と哀切の詩を書いた。

磐溪は決意し、伊東玄朴に疱瘡予防の種痘を依頼した。玄朴はジェンナーの牛痘苗がはいってきていないので、従来行われていた疱瘡予防の人痘法とミックスした方法を考えた。従来の人痘法は、中国から伝来した鼻から痘痂の粉をかがせて、軽い発疹をさせて免疫を得る方法だった。玄朴は、磐溪長女に人痘法を実施したが、それは腕に人痘の痂を溶いたものをすりつける牛痘法の技術であった。

これに成功したので、ついで磐溪次女、二男へも接種し成功した。しかし、一般的には人痘を接種することは、本当の天然痘にかかる危険を何よりも、玄朴は知っていた。そこで、佐賀藩主らへ、牛痘苗の導入を説いたのである。

牛痘が伝播してから、磐溪の三女雪、四女和歌にそれぞれ牛痘をうえて、好結果をえている。磐溪は、このよろこびを牛痘歌で記している。

人生に二患あり、麻疹と痘瘡、痘瘡は最も惨毒、十児に九は夭殤(若死)す、一に牛痘は西洋に来すより、赤功(本当の功績)を保ち万人の慶びを成す、(磐溪詩鈔四編)

伊東玄朴については、これからも時々紹介いたします。

会員便り

■ヴォルフガング・ミヒエル先生より

皆様

興味深い展示会及び講演会の案内を送ります。

政令都市移行記念 平成23年度植木文化財展

『医療からみた西南戦争』—近代ヒューマニズムは熊本から始まった!!—

展示期間 平成24年2月22日(水)~平成24年3月20日(火・祝)

展示会場 植木町田原坂資料館(熊本市植木町富岡 862 番地)

詳細につき下記のウェブサイトをご覧ください

<http://seinansensou.jp/wnew.html>

<http://www.museum.pref.kumamoto.jp/link/museum/north/ueki.html>

■太田記代子会員から

講演会「邪馬台国は吉野ヶ里だ」のお知らせ

日本最大級の弥生環壕集落として有名な吉野ヶ里遺跡は、国内だけでなく世界的にも注目されている重要な歴史遺産です。

さらに吉野ヶ里を守るようにその両側を流れる城原川・田手川などを含めた広い地域が歴史的、かつ景観的に世界遺産の価値ありと言われています。

このような吉野ヶ里遺跡群のまん中にメガソーラー(大規模太陽光発電所)をつくる行為は、世界的な遺産を台無しにする暴挙と言えます。

改めて吉野ヶ里遺跡の価値を再認識するため、「邪馬台国を考える会」の会長、奥野正男先生を講師にお招きすることにしました。先生は吉野ヶ里遺跡が発掘される以前から一貫して「邪馬台国は吉野ヶ里遺跡だ」と強く主張されています。まさに今回の講演会の講師に最もふさわしい方だと考えました。

【講演】奥野正男(邪馬台国を考える会会長、元宮崎公立大学教授)

「邪馬台国は吉野ヶ里だ」

【活動報告】太田記代子(元佐賀県保健所所長会長、前県議)

【質疑応答・自由討論】

【とき】H24年2月23日(木)18:00~20:00

【ところ】佐賀市メートプラザ2階

【主催】吉野ヶ里遺跡全面保存会

【協賛】城原川を考える会、佐賀の文化と歴史を学ぶ女性の集い、安全な健やか地域づくりをすすめる会、核の炎を憂ういざなみの会

【問い合わせ先】太田記代子(TEL 090-5727-0898)、久保浩洋(TEL 0952-52-5303)

【事務局】山崎義次(TEL 0942-94-2395)

くわしくは下記URLで

<http://ohtakiyoko.blog85.fc2.com/blog-entry-228.html>

編集後記

佐賀医学史研究会報第32号をお送りします。今回は伊東玄朴と大槻磐溪について記しました。磐溪は、幕末期砲術家としても知られ、幕府軍艦奉行木村撰津守とも友人で、磐溪門人の川崎道民が遣米使節団に選ばれたのは磐溪の推薦があったからでしょう。この遣米使節団に関しての磐溪や玄朴の関わりもまた調べていきます。

ミヒエル先生からは、熊本の展示の案内をいただきました。また太田会員からは、吉野ヶ里遺跡にメガソーラーが設置されるとの動きについて、講演会の案内です。遺跡保存がどうあるべきかという問題でもあります。

経費節約のため、できるだけメールアドレスでの発信をしたいと思います。メールアドレスのない会員は、FAX番号をお教えください。よろしくお願いいたします。(青木)